

って卒業し、群馬県に高校教師として就職してどうやら飯が食えるようになった。

父は全財産を失って大きな打撃だったが、私は私の財産でないので未練はなく、再出発する希望に沸いていた。

旅順、大連からの引揚げ

埼玉県 丹 直 清

一 出生から終戦まで

私は、昭和五年九月二十八日に、父直能、母ノフの五番目の子として水戸市で生まれた。八歳上の長姉きみ、七歳上の長兄直久、四歳上の次姉ゆき、二歳上の次兄直武、その後五歳下の弟直秀が生まれ、六人同胞となった。

昭和八年、父が鳥取師範学校長となったのに伴い、一家は鳥取市に転居した。私は昭和十二年四月、鳥取師範学校附属小学校に入学し、昭和十五年、小学校四

年生のとき、宮崎師範学校附属小学校に転入した。父が宮崎師範学校長に転じたためである。

そして更に、父が旅順師範学校長に転じたことに伴い、昭和十七年夏、旅順師範学校附属国民学校に六年生として転校することとなった。この時満十一歳、間もなく誕生日の九月を迎えて満十二歳となる直前、私は旅順市に居住することとなったのである。この時の家族構成は、祖母こう（七十六歳）、父と母、次兄、次姉、私、弟の七人であった（長姉と長兄は内地に在住）。

私は昭和十八年四月、旅順中学校に入学、第二次世界大戦の戦局急を告げる中であって、まともな勉強は一年生の時くらいだった。二年生の時は、荒地地の開墾作業などに動員され、三年生からは、大連市の甘井子地区に所在していた工場へ、学徒動員ということで駆り出され、親元を離れて寮生活をさせられていた。

同級生のうち一部は、同じく甘井子に所在していた別の工場に学徒動員され、残りの者は、旅順市に残留して旅順工大で榴弾製造関係の作業などに動員された

と聞いている。

昭和二十年、旅順中学三年生の時、滑空訓練が開始された。当時、グライダー（滑空機）には、初級用、中級用、上級用の別があったが、中学生を訓練の対象とするのであるから当然初級用である。第一期生（二十人程度）の要員が工場に動員されていた級友から選ばれ、五、六月頃に約二カ月の訓練期間を経て、これらの級友は無事三級滑空士の資格を取得した。

次に第二期生の募集があり、私はそれに応募した。第二期生は七、八月頃に同じく約二カ月の訓練期間を経て、第一期生と同様、三級滑空士の資格を与えられる予定だった。ところがハプニングが生じた。八月十日頃だったか、訓練中にT君が操縦を誤り、地上五メートルほどの高さから訓練機を尾部から地上に着地させ、幸い本人に怪我はなかったものの、機体破損、要修理のため訓練中断のやむなきに至ったのである。第二期生は、このため当分の間、自宅待機とされた。私はこの自宅待機期間中に八月十五日を迎え、敗戦を意味する玉音放送を聞いたことになる。

五十余年前のその玉音放送の記憶が、実はいさか曖昧である。雑音混じりの聞き取りにくい玉音を聞いた記憶はあるのだが、だれと一緒だったか思い出せない。祖母は高齢なので別室だったようである。父や次兄はいなかったと思う。次姉もいなかった（結婚して内地に渡り、六月の大阪大空襲で戦死していた。享年十九歳）。母と私と弟と三人で聞いたのかと思うが定かではない。

二 終戦から大連市へ移住するまで

八月十五日、終戦の玉音放送を聞いて間もなくのこと、級友K君と悲憤慷慨、鬱憤晴らしをしようということになった。対象は丘の上に最近新築中の旅順師範学校寄宿舎東郷寮である。「この新建築物をむざむざと敵の手に渡してなるものか。エイ、ヤー」と、二人で手当たり次第、木銃に短剣先を取り付けた武器を持って、新しい畳表を切り裂き、窓ガラスを叩き割って荒れ狂っていた。しばらくすると、丘の下の方から師範学校の学生がばらばらと何人も上がってくるのが見えた。手に日本刀を持っている。「貴様ら、何をして

おるか！」と凄いきんまくだである。さすがに青くなつて「敗戦で悔しいので鬱憤晴らしをしている」と説明すると、「悔しいことは理解できるが、決まった以上は深く施設を敵に引き渡すのが武士道というもののだ」と大目玉を食らったことが思い出される。

八月二十二日、ソ連軍機甲部隊が旅順市内に進駐してきた。非常事態の当時であったが、そこはやはり十四歳の子供、私はその日、郊外の塩田方面にハゼ釣りに行っていた。十歳の弟も一緒だったようだ。もう陽も落ちて、釣り竿を肩に家路を急いでいると、ごろごろと地響きをたてて、戦車が続々と進行して来るのに出会った。重量級の凄い戦車だ。息をひそめ、道端の民家の石塀に身体を張り付けるようにして、戦車群の通り過ぎるのを見送ったことが、今でも鮮明に記憶している。後日、多くの人の証言から、その日（ソ連軍旅順市進駐日）が八月二十二日だったことは確実と思われる。

ソ連軍が旅順市に進駐してきて以来、旅順市在住日本人は、ひとときわ不安な生活を余儀なくされた。それ

までは、それなりに現地住民の中国人たちとも、日本語・中国語を取り混ぜての会話のうちに、意思疎通も可能であった。しかし「ダー」「ニエット」「ダワイ」といった片言をはじめとするロシア語を操り、青い目や、赤毛、金髪のヨーロッパ系、中国人とあまり変わらぬモンゴル系など、多民族混在のソ連軍兵士が進駐してきてからは、彼らによる横行や乱暴狼藉が始まった。

最初に進駐してきた部隊は、ヨーロッパ戦線から直行してきた囚人部隊とかいう話で、特に柄が悪かったようであるが、後日、それよりはましな部隊に交代した。暴行を受けた日本人がG.P.U.^{ゲイペーウ}に駆け込むと、それなりに取り締まってくれたりもしたようだが、終戦直後はそのようなゆとりもなく、ただ彼らの言うなりに、時計、万年筆、その他めぼしいものを略奪されたのが多くの日本人の実体験であった。

九月末、旅順市新市街在住日本人は旅順市旧市街に強制移住させられた。新市街の高台（常盤町）所在の我が家は、旧帝政ロシア時代の海軍提督官舎を引き継

いだもので、白亜の立派な洋館であったが、この我が家も、二十四時間以内に退去するようソ連軍の命令を受けた。慌ただしく荷造りするが、大半の家具・家財は放置するほかはない。父が次兄の誕生日に購入した柱時計を持ち出そうとしたところ、立ち会っていたソ連軍将校が「置いて行け」と命ずる。父は「私物だ」と抗議するが、言葉が通じない。ソ連軍将校が苛立ってピストルの銃口を父の胸元に突きつける。次兄や私が青くなつて父をなだめ、その記念すべき私物の柱時計を放棄して事なきを得た。

荷馬車だつたと思うが、布団袋や柳行李などを積み上げたので、一家の財産としては何程のものも持ち出せなかつた。裏庭の鶏小屋で飼育していた何羽かの鶏の一羽を、次兄が荷馬車の後ろの方にぶら下げた。九月二十八日が私の誕生日である。その祝い膳に、せめても鶏をつぶして食わせてやろう、との次兄の心尽くしであつた。

旅順市旧市街では、最初は乃木町、次いで鯖江町に仮寓した。いずれも父母の知人の好意にすがつたもの

である。それも束の間、旅順市旧市街に集結させられた日本人を含め、すべての旅順市民は大連市へ移住するよう、ソ連軍司令官からの命令が発せられた。ある人の記録によると「ソ連軍として十月一日から七日まで、旅順駅から大連行きの移住列車を毎日一列車出します。手荷物は一人名につき行李・布団袋各一個ずつとして、この列車を利用して退去せよ」との命令であつた。

旅順から大連への移住は惨たんたるものであつた。多くの人々は本当に一人当たり行李一個、布団袋一個を担いでの逃避行という有様だつたようである。老人や子供を抱えた一家は特に悲惨であつた。

移住のルートは、鉄道のほか、旅大道路が主に利用された。旅順・大連間はおよそ四十キロメートル、徒歩約十時間の距離である。その間を荷馬車を雇つて移動する家族が多かつた。料金は千〜千五百円程度で、当時としては破格の高額料金である。私の一家は老祖母を抱えていたこともあり、父が算段したのである。幸いにもトラックを雇つて移動することができ

た。荷馬車で移動した家族の中には、途中で現地人の襲撃や略奪に遭い、被害を受けた人たちも多かったという。

三 大連市での生活

大連市へ移住した当座は、市の中央部高台の二階建て二軒（あるいは四軒）の棟割り長屋風住宅の一家の二階を間借りすることとなった。その一家は出征軍人の留守家族で、年若い夫人と乳飲み子の二人暮らし。終戦後の物騒な世の中なので、用心棒の意味としても入居して欲しいとのこと、渡りに舟と同居させてもらうこととなったのであろう。

ある日、階下の夫人の悲鳴が聞こえた。現地人の襲撃だ。屈強な現地人の男が数人、一階の居間の窓を破って布団や衣料を持ち出している。父をはじめ近所の日本人男性が数人で追いかける。私もついて走った。しかし、いくらも取り戻せなかった。

そのころ、大連には一中、二中、三中、大連中学、大連商業、大連工業などの中等学校が存在していたが、終戦と同時にソ連軍の管轄下に置かれたのだと思

われる。旅順に存在していた旅順中学校、その他の諸学校は、終戦に伴い、ソ連軍司令官との若干の交渉はあったものの、前述の旅順市民全員の大連への強制移住と並行して、自然閉校の形とならざるを得なかった。大連では、同様にソ連軍司令官との交渉が持たれたものと推測されるが、日僑学校として当分存続が認められていたようである。大連移住に伴い、私は大連日僑第二中学校に転校した。

しかし一カ月も通学したであろうか。一家を挙げて生活を維持していくために、私も、また附属国民学校（小学校）四年生だった弟も学業を中断し、働いて何がしかの金額を稼ぎ、家計を助けることとなった。父をはじめ、旅順師範学校および同附属国民学校の先生方は、すべて公の俸給を中断され、それぞれに自分達一家の生計を立てなければならぬこととなっていたのである。

父の決断は早かった。大連に移住して間もなく大連ドックに働きに出始めたのである。どんな仕事をしたのか聞いたことはないが、多分、日雇い労働の見習工

員のような仕事をしていたのではないかと思われる。父が大連ドックで働き始めたという話は、たちまち師範学校や附属国民学校の先生方の間に伝わり、「では、我々も貴賤を問わず働き口を見つけて生活費を稼ぐ」という行動の一つの動機となったようである。当時の感覚では、校長閣下が工員にまで身を落として働くのであれば、誰でも何でもできるということだったのであろう。

大連に集結すれば、商港都市であるから間もなく内地へ帰還できるのではないか、といった淡い期待は裏切られた。中国の国民党と共産党の勢力争い、いわゆる国共内戦に巻き込まれ、大連地区は、当時ソ連軍と中国共産党の勢力下にあり、満州（現在の東北地区）は国民党と共産党が競り合うといった複雑な状況のもとに置かれていたのである。

大連の冬は寒い。零下二十度を超す厳しい寒さに見舞われる。昭和二十年の冬は、この寒い大連で過ごすこととなった。我が家では幸い、大連移住の際に石炭を若干持参していたので、これを燃料としてストーブ

で暖を取ることができた。旅順からの移住者の多くは石炭を持参することもかなわず、寒さのために、特に老人や幼児を亡くされた家族が少なくなき、悲惨であった。

我が家は、冬を迎える少し前に大連市の西部に転居していた。転居の理由はよく覚えていないが、狭い二階の間借り暮らしをしているうちに、同じく棟割り長屋ながらも一戸独立した住宅が空いていたので入居した、といったことだったのであろう。

昭和二十一年一月二十四日、祖母こう死去（享年八十歳）。十分な食料もない生活の中での老衰死であった。その日の朝、布田の中で口から少し泡のようなものを吹き出し、微動だにしない老祖母を最初に見たのは私だった。「おばあさんの様子がおかしいよ」と親に報告したことを記憶している。

祖母の葬儀は、師範学校や附属国民学校の先生方が手伝ってくださった。我が家は浄土宗であるが、住職さんにお経をあげてもらった記憶はない。形ばかりの葬儀だったように思う。荷車に遺体を納めた棺桶と薪

を積み、大勢で押ししたり引いたりしながら丘の上の火葬場へ運び上げた。帰宅した後、狭い部屋の中で、大人たちが車座になって酒盛りをしていたことが思い出される。

大連での抑留生活の中で、家計の助けのために、十五歳の少年であった私が体験した仕事は、化粧品製造の手伝い、豆腐売り、たばこ売り、カステラ巻き売り、荷車押し、古着売り、パン売り、と書き出せばきりがない。

父は最初の大連ドック勤めを短期間で辞め、次々と武士の商法を試みつつ、我が家の家計を維持するのに懸命であったのだろう。父の昭和二十二年の年頭所感を次に掲げさせていただきたい。

偶 感

直能

一朝転落草莽臣 五十三年似一夢

日日練之糊口策 老鷲振起新春雪

次兄はいささか商才にたけたところもあって、当時、ブローカーのようなことをして稼いで、家計に寄与していた。また、母は元来頑健ではないところへ、

家族に食料を優先させたり心労を重ねたりで、寝込むことも少なくなかった。祖母が亡くなり、家族は五人となったが、米などは高価でも買えず、通常の主食は高粱、トウモロコシの粉、それも次第に低質・低価格のものしか買えなくなり、遂には、ふすまで団子をこしらえて食べたつもりでしたが、さすがにこのふすま団子は空腹少年の喉をも通らない代物であった。

父は、苦心惨たんして家計を支えるべく努めたが、急激に進むインフレには及ばず、知人の事業家からかなりの借金をしたようである。事業家たちも、引き揚げるときに財産の大半は置いていかねばならぬことは分かっていたので、ある程度信頼できると思われる人には、積極的に貸し付けてくれたらしい。父は几帳面な性格であったから、引揚げ後、着実にこの借金を返済し、知人の事業家に非常に感激されたと聞いたことがある。

四 引揚げ

昭和二十二年の冬は、ひときわ寒かった。石炭は前年の冬に使い果たしてもう無かったので、寝るときは

防寒帽をかぶり、靴下を履き、手袋をして布団にもぐり込むのであった。今にして思うと、その寒さは外気の温度の低いことによるのは勿論のことであるが、栄養不足によって倍加された寒さでもあったであろう。今でも、寝つかれぬほどの寒さの記憶がよみがえる。

抑留二冬目のその寒さの中にも、ようやく春の訪れを告げる朗報が耳に入るようになってきた。「引揚げが間近である」といううわさである。うわさはやがて事実となった。私たち一家全員も、いくつかの集団の一員としてまとめられて、最終的には旧大連埠頭近辺の收容施設に集結させられた。衛生状態が非常に悪く、下着のシャツや下帯の縫い目に沿って、ビッシリとシラミがたかっていたことを気持ち悪く思い出す。

いよいよ乗船。私たち一家の乗った引揚船は「辰日丸」という船名だったと記憶する。船内では、抑留中に在留邦人に対して威圧的であった労働組合幹部と思われる人を、数人の一般の人々がつるし上げる（弾劾する）のを目撃した。また、乗船者に対する慰労会が開かれ、船員たちが美声で「リンゴの歌」や「還り

船」を歌ってくれたことも思い出される。

機雷を避けるためか船足はきわめて遅い。大連を出港してから佐世保沖に到着するまで一週間ぐらいかかったのではなからうか。佐世保沖から棧橋まで、はしけに乗ったかどうか記憶にないが、棧橋でアメリカ兵にDDTを頭の上から身体中真っ白になるほど振りかけられたことだけは忘れられない。

我が家の記録では、昭和二十二年三月六日佐世保上陸、内地帰還となっている。大連出港は二月末との記憶があるので、二十七日あるいは二十八日に大連を離れたのではなからうか。

佐世保の海兵団兵舎跡が引揚者收容所だったと記憶している。一人二百円（我が家は五人で千円）支給されたように思う。

何日收容されていたのだろうか。やがて收容所から南風崎^{はえのさき}という国鉄の駅まで、引揚者一団でぞろぞろと歩いていった。途中、農家のおばさんたちが道端でふかしたさつま芋を売っていた。母が二十円だったか五十円だったかを支払って買ってくれた。その美味が忘

れられない。

関門トンネルを通ったこと、廃墟の広島を夜中に通過したらしいことなどを、ぼんやりと思いつく。

五 引揚げ後の生活

三月六日内地引揚げ後は、まず高松市の母方の親戚、佐々木氏方に落ち着いた。内地に在任していた長兄も早速駆けつけてくれて、互いに生存を喜び合った。

佐々木の伯母（母の姉）が、ともかくもと、白いご飯を出してくれた。まさに餓鬼そのもの、普通のご飯茶碗に七杯おかわりをした。塩を振りかけてむしゃぶり食ったのをよく覚えていた。伯母が側で涙ぐんでいたことも忘れられない。ひもじかったのだ。よく腹をこわさなかったものだと、今にして思う。

親族会議のようなことが行われたのであろう。引揚げ後の我が家が、まとまって生活するのはなかなか困難であるという判断から、私は、富山市で事業を行っている従兄弟の和泉氏のもとに預けられることとなった。富山市で和泉氏の食客になりながらその勧めに従

い、私は六カ月間、職業訓練所の電気実習を受講した。富山市も終戦直前に空襲を受け、市の中心部は焼け野原であった。森山電気製作所が職業訓練所の場所となっており、そこで焼けたモーターの銅線回収の作業などをして過ごした。あまり勉強した記憶はない。

同年九月、再び和泉氏の勧めに従い上京。大塚氏の好意により、有楽町の丸の内新聞販売所に住み込み、昼間は新聞配達員として働き、夜間は東京電気学校に通学することとなった。すぐ近くにアーニービル（旧東宝劇場）があり、アメリカ進駐軍兵士が行き交い、夜の女性も多く、少年には刺激的であったが、はじめに働き、学んだ。今は懐かしい青春時代である。二年間その生活が続け、昭和二十四年九月、同校を卒業するとともに丸の内新聞販売所を辞し、富山市に帰った。当時、父母も富山市に移住していたので、父母のもとに帰ったわけである。

昭和二十五年四月、新制富山県立雄峰高等学校定時制四学年に編入学、昭和二十六年三月、同校卒業。昭和二十七年四月、東京の大学に入学。昭和三十一年三

月、同大学卒業。その後、高等学校検定教科書発行会社に入社し、編集部・図書出版部・経理部等に勤務し、平成六年十二月、同社を退社。この間、昭和三十四年に結婚し、昭和三十六年に長男誕生。また、昭和三十九年に次男誕生。今日に至っている。

六 旅順師範学校・同附属国民学校のこと

父に関する記録について、最後に簡潔に述べておきたい。

父は旅順師範学校に赴任する前、宮崎師範学校校長を務めていた。昭和十五年には皇紀二千六百年ということ、その記念式典が官幣大社宮崎神宮所在の宮崎市において盛大に挙行された。その時点での、宮崎師範学校長であったから、父にとっては最も輝いていた時代であったのかもしれない。

その後、昭和十七年に、前述のとおり父は旅順師範学校に赴任した。師範学校は昭和十八年に中等学校から専門学校へ昇格することになっていたので、その準備などもあり、結構多忙だが、また充実した学校長生活であったかと思われる。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅をラジオの玉音放送で聞いて以来、父の心労はいかばかりであったか、今は計り知ることも出来ない。

ある人の記録によると、八月十五日午後二時に、旅順師範学校講堂で当時残留していた教官・学生の集会があり、父が台上に立って「今はただ御宸襟（大御心）を拝察するのみであります」と簡潔に述べたとのことである（集会の場所は講堂ではなく体育館前だったとの説もある）。

またある人の記録によると「八月十六日、丹校長の命令で奉安殿の御真影および勅語・詔書を焼却する」と記述されている。

玉音放送のあった日、および翌日に、当時としては即刻、最善と思われる措置をとったということであろう。

父は、引揚げ後しばらくの間、旅順師範学校に関する残務整理的なこともしていたようである。旅順のみならず旧満州奥地から引き揚げて来た在學生・卒業生たちのために、内地における再就職に必要な学証明

の書類を、何通も作成したと聞いた記憶がある。

引揚げ後、父は民間会社や私立高校・大学の事務部門などに勤めて生活の資を得ていたが、再び積極的に教職に就こうとはしなかった。心中、戦前教育に対する様々な思いがあったのではないかと推察されるが、直接父にその点について聞いてみたことはない。

二人の娘を亡くしたが、四人の息子がそれぞれに所帯を持ち、孫にも恵まれ、謡曲や読書、たまには小旅行を楽しむなど、父母の晩年はつつましいものであった。

父は、昭和五十三年二月五日、横浜市の病院で八十歳の生涯を閉じた。母もまたその後を追うように昭和五十四年八月六日、奇しくも広島原爆記念日に、逗子市の長兄宅で、同じく八十四歳の生涯を閉じた。

ある開拓団員父娘の生きざま

埼玉県 矢部 時子

はじめに

私は、幼いときに開拓団の家族の一員として、満州に移住した。以来、人生の半分以上を中国で過ごしてしまっただが、それこそ波瀾万丈の半生であった。永住帰国をしてからも苦労は絶えなかった。悔いても仕方ないことではあるが、この悲劇は私たちまでで終わりたい。

父の生い立ちから苦労の生涯や、私が残留日本人として帰国した前後の悲しい思い出などを書き残して、二度とこんな悲惨なことが起きないように、また、これからの子供たちに絶対にあのような苦しみをさせることのない世の中となることを願うものである。

もとより幼かった私には、終戦後までのことはあまり記憶に無く、よく分からないので、はっきりしたこ